

街頭紙芝居 10 則

立ち位置

1. 舞台の隣に立って、絵を見ながら読む
2. 観客が絵に集中できるように、体を動かさない

読み方

3. 演じようとせず、地声でゆっくり読む
4. マンガ・活劇・新派で、心持ちを切り替える
5. 会話と地（説明）では読み方を変える
6. 声の高さ・強さ・早さを組み合わせて読み分ける
7. 絵を見ながら、絵が喋っているように読む

抜き方

8. 観客の想像力をかき立てるよう、集中して抜く
9. 演出に合わせた抜き方を選ぶ

心得

10. 場数を踏んで、ゆとりを持って読む

立ち位置

正面から見て舞台の左側面に立ち、紙芝居を見ながら演じます。抜いた絵は舞台の後ろに置き、裏書きを読みます。舞台の側面に立つ利点は、絵を確認できることです。「読み方」でも述べますが、絵を見て、絵が喋っているように読むための立ち位置です。

注意すべき点は、体を動かさないことです。人の目は、動くものに注意が向けられます。観客が絵に集中できるように、なるべく体を動かさないようにしましょう。

「子供は紙芝居を見に来ている。おじさんを見に来ているのではない」(永田為春氏)

読み方

読み方のポイントは、「調子」「会話と地（説明）の区別」「読み分け」の3つです。

調子

最初から活弁や講談を意識して読むと、観客の注意が調子そのものに向けられ、肝心の話がぼやけてしまいます。大切なのは調子ではなく、話の内容を伝えることです。

iPadをお持ちの方は、永田さんの音声を真似することから始めて下さい。お持ちでない方は、普段の話し言葉と同じ地声で十分です。続ける内に、自ずと自分なりの調子が生まれてきます。

また、街頭紙芝居の3ジャンル、すなわち「マンガ」「活劇」「新派（今で言う「ドラマ」）」のそれぞれで、心持ちを変えることが重要です。具体的には

マンガ → 口角を上げ、楽しい調子で読む

活劇 → 緊張感をもって、ハリのある調子で読む

新派 → カまず、落ち着いた調子で読む

ことを心がけて下さい。

「無理に演じようとせず、大きな声でゆっくり読む」(加太こうじ先生)

会話と地（説明）の区別

会話と地をしっかりと区別することで、メリハリのある実演になります。コツは、会話と地の間に半秒くらいの間をあけることです。

また、会話から地に移る時、声の高さを変えようまくいきます。例えば、
会話が低いトーンの時 → 続く地のトーンを若干下げる
会話が低いトーンの時 → 続く地のトーンを若干上げる
のように考えます。

子供の注意を引くため精練された独特の語り口は、地の部分にあります。iPadをお持ちの方は、永田さんの音声を参考にして下さい。ただしあくまでも、調子よりも伝えることの方を大切にして下さい。

「一本調子にならないよう、会話と地を区別する」(森下正雄氏)

読み分け

演じ分けは、紙芝居師としての力量が問われるポイントです。と同時に、子供が面白いポイントでもあります。「高さ・強さ・早さ」を組み合わせて、年代と性別を演じ分けます。例えば、

お爺さん → 低い・強い・ゆっくり

お母さん → 高い・弱い・普通

こども → 高い・弱い・はやい

のように考えます。

その上で、描かれている人物をよく見ながら声を出すと、登場人物の個性が出てきます。慣れてくると、どんな紙芝居にも対応できるようになります。

「お母さんならお母さん、子供なら子供の感じを出す」(森下正雄氏)

「絵が喋っているようにやる」(永田為春氏)

抜き

街頭紙芝居の演出における特色は、抜きに集約されます。次に何がでてくるのか、どうなってしまうのか、観客の想像力をかき立てます。代表的な抜き方を3つ挙げます。

静かに抜く

主に余韻を表現する時に使います。観客に次の場面を想像する猶予を与えます。

新派もの(ドラマ)のような、話の展開がゆったりとした作品で、比較的多用される抜き方です。

素早く抜く

話の急変を表現する時に使います。強い声と合わせて、観客の感情を高ぶらせます。戦いや事件、事故でよく使われます。ただし、あまり多用すると効果が薄くなってしまいうので、ここぞという場面に絞って使うのがコツです。

半分抜いて

新しい人物や事柄を表現する時に使います。

紙芝居の絵を見ると、人物や物が右半分と左半分に分けて描かれていることがよくあります。これは、演者が半分まで抜くことを想定したものです。半分まで抜いて、「さ」といった具合に残りをスッと抜くと、観客の心も同時に切り替わります。

この他にも、「抜く前に1寸おいてから抜く」や「抜きながら話す」など、様々な演出がありますが、まずは上記3点をしっかり身につけて下さい。演者が集中して抜くと、観客の集中力も大幅に上がります。

心得

ここまでのポイントを意識し、場数を踏みましょう。場数を踏むことで余裕をもって読めるようになり、観客に安心感を与え、話への没入を高めます。

「最初は緊張して足が震えた。とにかく場数を踏むように。」(森下正雄氏)

【参考】

- ・黄金バットで知られる街頭紙芝居の中心的存在、加太こうじ先生の言葉
- ・最盛期から紙芝居屋さんを続けてこられた、森下正雄氏、永田為春氏のアドバイス
- ・昭和19年に刊行された『紙芝居実演講座』(砥上峰次 著)
- ・現在街頭で実演を続けている私、佐々木遊太の実体験